

---

# ヒビ割レタ絆

skyry

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒビ割レタ絆

### 【コード】

N9029Y

### 【作者名】

skyr y

### 【あらすじ】

嗚呼、誰か

時間を戻してください

平和だったあの頃に……

## 一話 三人だけのマナージャー

八野海季、三雲咲人、佐々木光吉、そして私、緑空小春。

小さい頃から一緒だった私達。お互いがお互い、皆大好きだった。

海季はいつも元気で、熱くて、ちょっと口は悪いけど、根は優しくて。

咲人はいつもクールで、一見、人を見下したような感じだけど、口下手で、本当は凄く優しい。

光吉はいつも明るくて、誰にでも優しく、海季と咲人が喧嘩すると、いつも仲裁に入って止めてくれる。私はいつもみつくんって呼んでいる。

私達はいつも一緒に、遊ぶ時も、寝る時も、お風呂に入る時も、いつも四人一緒だった。

もちろん、親同士も仲が良く、家も近かったから、いつでも会う事が出来た。

「みつくん！咲人と海季は？」  
「下にいるよ。もう少ししたら来るよ」

「二人にして大丈夫かな？また喧嘩するんじゃない？」

「今日は大丈夫だよ」

にっこり笑ったみつくに、私は引き込まれた。

しばらくして、ようやく咲人と海季が来た。

「遅いよ！何してたの？」

「ふふふ。まだ秘密だよ。まだ時は来てはいない……」

相変わらず厨二病っぽい台詞を吐く咲人。

「えー何々？すごい気になる！」

「ダメつつつてんだろ？」

「ちえー」

結局私は、まだダメと言われて、教えて貰えなかった。

そんな事は置いておいて、私達は部屋でずっとクリスマスケーキを食べながら、雑談をしていた。

そして午前零時……。

「もう次の日になっちゃったねー。クリスマスケーキ、まだ残ってるから、お母さん達にもあげる？」

くるつと後ろを向くと、パァンという銃声とともに、細長いカラフルな紙が舞った。

「誕生日おめでとう小春！」

一瞬意識が飛んだ気がした。

「びびび、びっくりした……。ありがとう三人共！」

思っている事を素直に言葉にする。

「別にお前のためじゃねーぞ。光吉がどうしてもって言うから仕方なく付いて来てやっただけだ」

素直じゃない海季。でもそれが海季なんだ。

「うん！」

「俺は海季と違って小春のために来たんだ。俺に光を与えてくれた小春のためにな」

「うん！ありがとう！」

何のことが分かんないけど、二人をぎゅっと抱きしめる。

「あーずるい二人共！小春！俺だって小春のために企画したんだよ」

「うん。ありがとう、みっくん、海季、咲人」

友達なら当然の事かもしれないけれど、私は凄く嬉しかった。嬉しすぎて、涙が出てきた。

「んだよ、何泣いてんだよ、バカ小春」

「えへへ……。嬉しくって」

「相変わらず小春は素直だね。どこかの熱血さんと違って」

「うっせー!」

ありふれた日常。

当たり前の日常。

こんな当たり前の日常が、ずっと続けばいいな。そう思っていた。

でも、神様は、私達を見捨てた。

同じ高校に受かって、また楽しい日々が待っていると思っていた。

けど……。

それは叶わなかった……。

高校に入ってから、みっくん達はバスケット部に所属した。

三人は元々運動神経抜群なので、すぐにレギュラーの座を勝ち取った。

そこで私は三人に、バスケット部のマネージャーになってほしいと頼まれた。もちろん入った。

その日から私は、マネージャーの仕事に専念した。ドリンクを配ったり、次の対戦相手の事を調べたり。

そして数週間が経ち、私はだいぶマネージャーの仕事に馴れ、部員とも仲良くなった。

「そうなんだ。えー！うっそ！あははっ」

「そうそう。ははっ。緑空面白いな」

しかし部員達と楽しく話をしている私を、つまらなそうに見ている三人がいた。

ある日、私は三人に呼び出された。

「ねえ小春……。お願いがあるんだ」

「な、何？みっくん」

「これは俺だけのお願いじゃなくて、俺達からのお願いなんだ。小春……。俺達のマネージャーになってくれないかな？」

「え……。？それって」

「俺達だけ見てるって事だよ。このバカ小春」

聞こえなかった事を、海季が言ってくれた。

私が……。三人だけのマネージャー？

「三人……。だけの……」

「嫌か？」

子猫のような目で見つめてくる咲人に、私は頷いてしまった。

これが悪夢の始まりだということも知らずに……。



## 二話 逃がさない

「行け八野！」

「っと」

ドリブルで相手を抜き、見事ゴールを奪った海李。いつもなら私も席を立てて叫んで喜んでいるが、今日はそんな気分じゃない。だって……。

昨日、三人だけのマネージャーになってほしいと言われた私は、あまり納得のいかないまま終わってしまった。

なぜ、三人がいきなりあんな事を言い出したのか、私は見当も付かなかった。

「小春、小春！」

どうやら私は意識を飛ばしていたようで、同じマネージャーの雪村蘭が、心配そうに顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？もう練習終わった？」

どうやら、私が意識を飛ばしている間に、練習は終わってしまったようであった。

「ほら、あの三人待ってるよ。行ってあげな」

「う、うん」

「じゃあね。ばいばい」

「ばいばい」

雪村さんと別れて、私は三人の元へ駆け寄った。

「お疲れ様！海季、今日も良かったよ」

「おう。さんきゅ」

照れて頭を掻く海季とは逆に、みつくと咲人は、少し暗い顔をしていた。

「小春、俺達は？」

「えっ……あ……。ごめん。途中から意識飛んじゃって……。見れなかった……」

そう言うと二人の顔はすつと元に戻った。

「なんだ、ならそうと早く言ってくれば良かったのに。大丈夫？」

「う、うん。大丈夫……」

とっさに作り笑いを浮かべた。

「ねえ小春……」

真剣な声で、みつくんは言った。

「なつてもらってすぐで悪いんだけどさ……。やっぱり、マネージャー辞めてくれる？」

「え……？」

マネージャーを辞める？

「なん……で」

「小春、俺達のマネージャーなのに、俺達以外の部員と話すでしょ？」

「それはっ！」

「仕方ない？マネージャーだから？」

「うっ……」

「凶星だね」

事実だ。マネージャーは部員皆を見なくてはいけない。三人だけなんて、無理なんだ。

「もう小春は放っておけないよ。……監禁、するしかないよ」

「かん……きん……」

なぜ？

どうして？

誰が三人をこんなに狂わせたの？

「どうする、小春」

冷たい目。咲人……。何かが変わってしまった……。

私は首を横に振り、その場を飛び出した。

「小春！！」

名前を呼ばれても止まらない。振り向かない。

後ろから三人の足音がする。

彼等はバスケット部。私は帰宅部。

足の早さは、圧倒的に彼等の方が上だった。

「捕まえたぜ」

「海李っ……！！」

がちゃん。手首に何かを掛けられた。

手錠だ。

「逃がさねえよ？」

「お前は俺達から逃れられない……。一生囚われの身だ。

咲人にそう言われ、私は頬に何かが伝うのを感じた。

どうして……。。

そう心の中で呟いていた。

### 三話 監禁

「小春、小春」

ベッドで寝ていると、名前を呼ばれ、起こされる。

「なっ……何」

「ご飯だよ。今日はオムライスだよ」

「……うん」

一見、仲の良い家族に見えるかもしれない。

でも、実際私達は家族ではない。

私は、三人に監禁されたのだ。

今私がいる場所は、咲人のアパート。咲人が父親に頼んで買って貰ったというアパートである。

「おら、お前の分だ。バカ小春」

相変わらず口の悪い海李。

こうして見れば、ただの仲良しな友達。端から見れば、私が監禁されているなんて、誰も想像しないだろう。

だが、私が監禁されているのは紛れもない事実。嘘も偽りもない。

「……食べないのか」

「……」

「食べないと死んじゃうよ?」

「……うん」

「食べさせてあげようか?」

「……」

うんとも言っていないのに、はい、あーんと言って、オムライスをスプーンですくって口へと運んでくるみつくん。

「んっ……」

ぱく。とオムライスを口内へ。

「……どうだ、味は」

「……美味しいよ。……咲人……」

何で変わっちゃったの?

この一言が言えなかった。

怖かった。

今はまだ、こうして優しくしてくれているけど……。何が、変わっちゃうんじゃないかって……。

「どうした小春。変だぞ」

「ま、そりゃそうだろ。監禁されて、明るく振舞える奴なんかいねえっつの」

「それもそうだな」

分かってるんだ。彼等は。分かってる。でも……。

「止められないんだよ、小春」

私の心を見透かしたかのように、みっくんが言った。

「さて、じゃあ飯も食った事だし、風呂でも入るか」

「小春は誰と入る？」

「え……」

誰と？

一人で入るんじゃないの？

「何だよ、一人で入んのか？」

海季の不機嫌そうな声に、びくりとしながらも、弱々しく頷く。



すると海季はチツと舌打ちした。

「んだよ……。つまんね」

「まあいい。楽しみは夜に取っておくものだ」

この時私は咲人の言った言葉の意味なんて、ちっとも分からなかった。

「……………」

どうして三人はこんなことを……。

いつも元気で熱くて、でもちょっと口が悪くて、太陽みたいな存在だった海季。

冷たくて、人を見下しているような感じだけど、根は優しく、頼りになる存在だった咲人。

いつもニコニコしていて、誰にでも優しく、咲人と海季が喧嘩した時、いつも仲裁に入って止めてくれたみっくん。

その三人が、どうして……。

でも、私は三人を嫌いになれない。

三人が好きだから。

シャワーと一緒に、目から涙が零れた。

お風呂の鏡で自分の顔を見た。

目と鼻が、赤かった。

自分で、自分がどうして泣いているか分からない。どうしてだろう。次々と涙が零れる。

体を洗い終え、バスタブに浸かり、狭い空間で体育座りする。涙は止まらず、バスタブの中のお湯に落ちてゆく。

「咲人……海李……みつくん……」

三人の名前を呟く。

昔の三人に戻って……。

何が三人を狂わせた？

何が私達の絆にヒビを入れた？

もう、元には戻れないの……？

様々な疑問を浮かべたまま、私はお風呂を出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9029y/>

---

ヒビ割レタ絆

2011年11月27日01時53分発行